長崎大学教育学部教育科学研究報告　第33号　39～47（1986）

幼児期の寄付行動に及ぼすモデリングの効果

善岡　宏 *1　大塚一徳 *2

Effects of Modeling on Preschool Children's Donating Behavior

Hiroshi YOSHIOKA and Kazunori ŌTSUKA

問題及び目的

従来，心理学の研究においては，〝不安〟や〝恐怖〟あるいは〝攻撃行動〟といった人間行動のネガティブな側面の研究に比べて，〝思いやり〟や〝人助け〟といった人間行動のポジティブな側面の研究はあまり行なわれていなかった。〝思いやり〟や〝人助け〟といった行動は心理学では〈向社会的行動〉(prosocial behavior)または〈愛他行動〉(altruistic behavior)と呼ばれ，この10年ほどの間に急速に研究が進んできている (Mussen, P. ,& Eisenberg—Berg, N. , 1977 : 高野，1982)。〈向社会的行動〉についてはRushton (1976)が「外的な報酬を期待することなく他人や他の集団を助けようとしたり，こうした人々のためになることをしようとする行為」と規定している。したがってこの行動の範囲は広く，Mussenら(1977)の挙げたリストによれば，寛容さ，利多心，同情，悩みをもつ人々に物質的・心理的な援助を与えること，自分の持ち物を分け与えること，慈善団体への寄付行為，不正や不平等や野蛮さを少くすることで福祉を高めようとする活動への参加など多岐にわたっている。最近ではこのような行動を生起させる様々な要因に関心がもたれ，研究がなされている。

ところで〈向社会的行動〉は，生活経験や意図的な訓練によって一般に学習される性質のものであると考えられる。しかしいくつかの研究は，子どもの社会化の過程で〈向社会的行動〉の獲得に観察学習ないしはモデリングが重要な影響を及ぼすことを明らかにしている（たとえばElliott, R. &Vasta, R.,1970 ; Sprafkin, J N. ,et al, 1975 ; 川島，1980など)。このように〈向社会的行動〉に関する要因が社会的な学習と関連づけられて研究される方向が見出されたのであるが，1つの問題として〈向社会的行動〉を具体的，的確にどのようにとらえるべきかすなわち〈向社会的行動〉の測度の問題がある。この点に関してはRushton (1976) の提唱した5カテゴリーが参考になる。彼は〈向社会的行動〉の測度として，(a)他の子どもやチャリティへの寄付行動(b)実験場面での救助及び援助行動(c)競争場面での他人への配慮(d)教師との関係ならびに友人間における社会的地位(e)自然観察場面での救助および分配行動，を分類している。さらに彼は，分与行動としてトークンあるいはポーカチップなどを分与させるという実験手続きはテスト・再テスト法による信頼性を備えており，かつ教師の評定と子どもの愛他性の他の測度と相関があることから構成概念妥当性も具備していることを指摘している (Rushton, 1976) 。われわれはこの点に依拠して，〈向

＊1　長崎大学教育学部教育心理学教室
＊2　広島大学大学院教育学研究科

社会的行動〉の測度を他の子どもへの寄付 (donating to another child) 行動に選定した。この寄付行動がモデル観察後にどのような変容を示すのかがわれわれの第1の関心事である。

松崎(1984)は，モデリング効果を実験的に検討する際の1つの問題として，被験者がモデルを観察する前にすでに〈向社会的行動〉をとる傾向を持ちあわせていたかどうか—先有傾向—がこれまでの研究では明確にされていないことを指摘している。被験者の実験室外の経験の差異にもとづいて5・6歳児においてもこのような先有傾向に個人差が生じることが考えられる。したがって，まずプリテストにおいて被験者の寄付行動の先有傾向を測定しておく必要がある。この先有傾向として現われる寄付行動がモデリングによってどのように変化していくのかがプリテスト手続きの導入でより一層明らかになるであろう。

学習された結果生じる行動変容は，より広く般化することが望ましいと思われる。社会的に望ましい行動が学習事態以外の場面へも般化するのかどうかに関する研究はあまり見られない。Elliott と Vasta(1970)は，モデリング効果の般化について実験的に検討し，モデリングの効果は見出したものの般化効果は見出していない。一方，Sprafkin ら（1975）は，モデルの示範した〈向社会的行動〉とは若干異なる他の行動への般化を見出している。このように，モデリング効果の般化については一致した結果が得られていない。この点も研究テーマとなりうるであろう。

以上のことからわれわれの研究目的を次のように要約することができる。

(1)幼児の寄付行動の先有傾向がモデリングによってどのように変化するかを明らかにし，

(2)モデリング効果の般化について検討し，

(3)寄付行動の男女差について検討する。

方　　法

1.被験児　長崎市内のO幼児園の年長児（5歳7ケ月～6歳7ケ月，平均6歳2ケ月）で，男児30名，女児29名の計59名がプリテストの結果にもとづいて等質な2群—愛他的モデル群と非愛他的モデル群—に分けられた。

2.材料　ジャンケンカード（7cm×7cmの黄色のカードで，じゃんけんかあどいっかいと描かれている)。絵合わせゲーム用カード（7cm×7cmの表が白色，裏が黄色で，このカードは20枚1組になっている。うち同じ絵のカードが2枚ずつ5組の計10枚が含まれている。これらの10枚のカードの裏には，じゃんけんかあどいっかいと描かれており，ゲームが終ると10枚のジャンケンカードをもらったことになる)。ポスター（38cm×54cmの白画用紙に泣いている女の子の絵と，かずこちゃんのクレパスがなくなりました。よかったらかずこちゃんにクレパスをわけてあげてくださいと描かれている)。クレパス箱（9cm×17cm×2cmの12色入りのクレパス箱で，中は白色である)。なお予備的な調査の結果，本実験で用られたジャンケンカード（以下カードと略す）が幼児にとって価値又は魅力があることが確められている。

3.実験者　2名の女子大学生で，愛他的行動モデル群の教示・テストを行なう者と非愛他的行動モデル群の教示・テストを行なう者に分けられた。なお別の2名の女子大学生が被験児とジャンケン遊びをするために各群に配属された。

4.手続き　図1に手続きの概要が示されている。被験児はまず誘導者によって保育室よ

り5名ずつ園内の遊戯室前の廊下まで導かれ，椅子に座ってテストの開始を待った。その後，被験児は個別に実験室（図2参照）に招かれ，寄付箱の横を通り机をはさんで実験者と向きあって座った。各被験児に『今からお姉さんがいくつかのおたずねをします。大きな声ではっきり答えて下さい。』の教示のもとに次の6項目の質問がなされた。

①おなまえは何といいますか？

②おとしはいくつですか？

③お誕生日はいつですか？

④先生のお名前は何といいますか？

⑤何組ですか？

⑥幼稚園の中でどんな遊びが好きですか？

(a)プリテスト：被験児の回答を記録した後，実験者は被験児に前述のカード10枚を渡し，次のような教示を与えた。『どうもありがとう。とてもはきはきわかりやすく答えてくれたので，ごほうびにこのジャンケンカードを10枚あげます。ジャンケンカードというのは，このカード1枚でそこにいる（実験室内にいる女子学生を指しながら）お姉さんとジャンケンが1回できます。でも，このカードがもらえなくてジャンケン遊びができないかわいそうなお友だちもいます。もし○○ちゃんが，自分のジャンケンカードをかわいそうなお友だちにわけてあげたいと思ったら，この（ついたてを指して）後に置いてある箱の中に何枚でもいいから分けてあげて下さい。○○ちゃんが10回ジャンケンをしたいと思ったら箱の中に入れなくてもいいですよ。ではお姉さんとのジャンケンがんばってね。』

図2から分かるように，椅子や机の配置に工夫をし，被験児がジャンケンをしに行く際に必らず寄付箱の前を通るようにしてある。被験児は他人から見られていない状態でカードを寄付する機会が与えられた。箱の中には前もって8枚のカードが入れられており，実験者及びジャンケンをする女子学生や外部から見えないようになっている。また寄付箱の後のついたてには，被験児の目の高さの位置に，じゃんけんかあどをもらえないこどものはこと書かれた画用紙が貼ってある。

被験児は寄付した残りのカードを持ってジャンケンをしに行き，枚数分だけジャンケンをすると退室した。その後すぐに寄付したカードの枚数を記録し，箱の中に8枚のカードを残しておいた。

上述の手続きによって行われたプリテストの結果にもとづいて，各被験児は愛他的行動モデル群と非愛他的モデル群の2群にほぼ等質になるように分けられた。

(b)モデル観察：プリテストと同様に被験児は5名ずつ実験室前の廊下に誘導され，椅子に座って実験開始を待っていた。その間，被験児は反対側の壁に貼られたポスターを見る機会が与えられた。ポスターについては一切言及されなかった。個別に招き入れられた被験児に対してクレパス2本を渡しながら次のような教示を与えた。『きょうはお姉さんと一諸にお勉強をします。そのお礼にあなたに2本のクレパスをあげます。お勉強が終るまで机の上に置いて下さい。』(被験児がクレパスを机の端に置いた後)『では○○ちゃん今から絵合わせゲームをします。この絵合わせゲームは，同じ絵のカードを見つけるとそのカードの裏はこのようにジャンケンカードになっていて，この前と同じようにあのお姉さんとジャンケン遊びができます。まずお姉さんがやってみますから，○○ちゃんは見ていてね。』このような教示を与えた後 実験者が絵合わせゲームを示範した。示範の後，

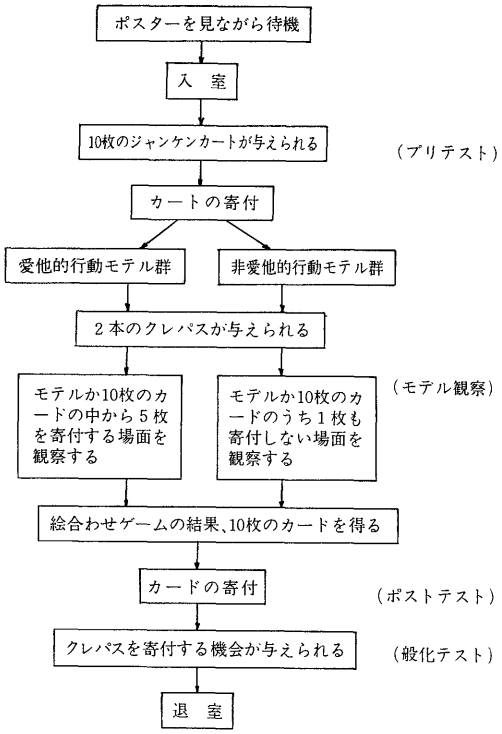


図1 実験手続きの概略

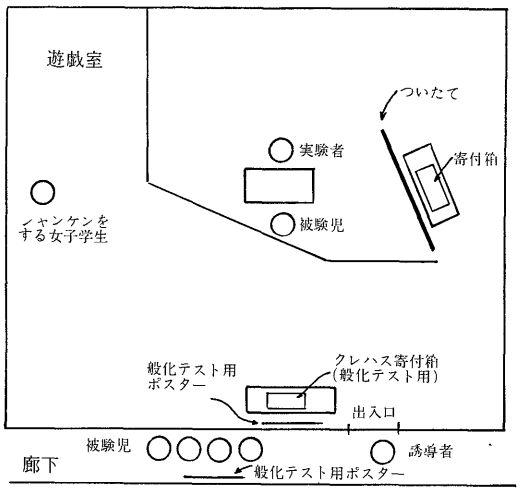


図2 実験室の概観

(ア)愛他的行動モデル群：『○○ちゃん，一緒に来て。今お姉さんは10回ジャンケンができるカードを持っているけど，半分の5枚はジャンケンができないかわいそうなお友だちに分けてあげよう。』と言いながらモデル（実験者）は寄付箱に1枚ずつ5枚全部を入れる寄付行動を被験児に観察させた。続いてモデル残りの5枚を持ってジャンケンをしに行く。

(イ)非愛他的行動モデル群：『○○ちゃん，一緒に来て。今お姉さんは10回ジャンケンができるカードを持っているね。お姉さんはジャンケン遊びがしたいし，かわいそうなお友だちの箱にはたくさんはいっているから分けてあげないの』と言って1枚も寄付箱に入れない場面を被験児に観察させた。続いてモデルは10枚のカードを持ってジャンケンをしに行く。

のいずれかの観察を各群の被験児は1回ずつ行なった。

(c)ポステスト：モデル（実験者）のジャンケンが終った後，再び実験者と被験児は向きあって座り，『では今度は○○ちゃんの番ですよ。』と言って，被験児に絵合わせゲームをさせた。被験児が絵合わせゲームをし終ったところでカードの枚数を確認させた。さらに『○○ちゃんよかったらジャンケンができないお友だちに分けてあげてね。』言って，寄付箱の前を通ってジャンケンをする女子学生のところへ行くように指示した。

(d)般化テスト：般化テスト用の寄付箱はクレパス箱で，その中には前もって3本のクレパスが入っている。その箱の出入口のすぐ横に置かれた椅子の上にある。また室外の壁に貼られているのと同じポスターが被験児の目の高さの位置に貼られている。このように，カードの枚数分のジャンケンが終った被験児は，実験室を出る前にクレパスを自発的に寄付する機会が与えられた。

結　　果

プリテストとポストテストにおける各被験児の寄付数が図3に示されている。これらのデータを参考にして愛他的行動モデル群がＡＬＤ群 (Altruistic model — Low Donating)，ＡＭＤ群 (Altruistic model — Middle Donating)，ＡＨＤ群 (Altruistic model — High Donating) の3群に分けられた。また非愛他モデル群はＮＬＤ群 (Non-altruistic model — — Low Donating)，ＮＭＤ群 (Non-altruistic model — Middle Donating)，ＮＨＤ群 (Non-altruistic model — High Donating) の3群に分けられた。このうち Low Donating はプリテストにおけるカードの寄付数が0で，寄付行動の先有傾向が低い群であり，High Donating は寄付数が5～10枚で先有傾向が比較的高い群である。Middle Donating はそれらの中間群で，寄付数が1～4枚であった。

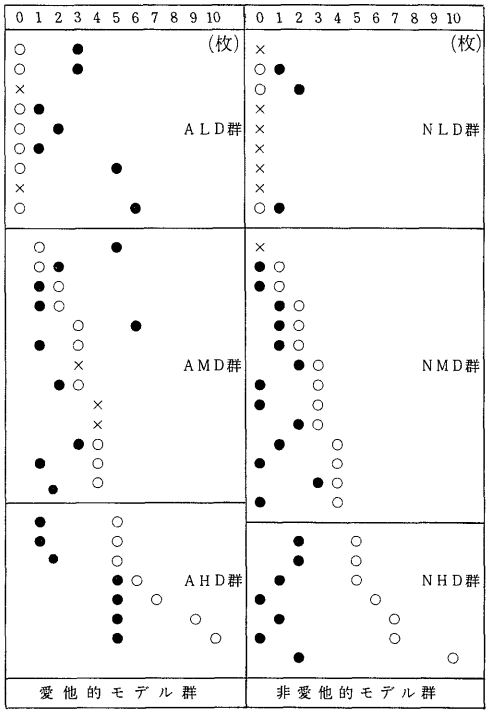
1.プリテスト　個人別の寄付数は，0から10枚までの範囲に分布していることから，寄付行動の先有傾向に個人差が認められる。また女児の方が男児よりも寄付数が有意に多いことが明らかである（表1）。

表1　プリテストにおける男女別の寄付数（中央値）

性	中央値	検定結果
男児	1.5	ＣＲ＝1.695
女児	3.25	Ｐ＜0．05

2.ポステスト　各群のプリテストからポストテストへの寄付数の変化（中央値）が図4に示されている。統計的検定の結果，ポストテストにおいてカードの寄付数が有意に増加したのは，ＡＬＤ群（Ｔ＝Ｏ，Ｐ＜．01，ｄｆ＝7）のみであった。ＡＭＤ群ではプリテストでの寄付数を維持しており，ＡＨＤ群では有意に寄付数が減少している。（Ｔ＝Ｏ，Ｐ＜．01，ｄｆ＝7）同様にＮＭＤ群，ＮＨＤ群でも有意な寄付数の減少が認められた。（それぞれ，Ｔ＝Ｏ，Ｐ＜．005，ｄｆ＝13：Ｔ＝0，Ｐ＜．01，ｄｆ＝7）。

次に，プリテストからポストテストへかけて寄付数の変化を男児と女児で比較した。これらの比較は次の下位4群間で行なった。



○ プリテスト時の寄付数
● ポストテスト時の寄付数
× プリテスト時とポストテスト時で同じ寄付数であった被験児の寄付数

図3　プリテストとポストテストにおける各被験児のカードの寄付数

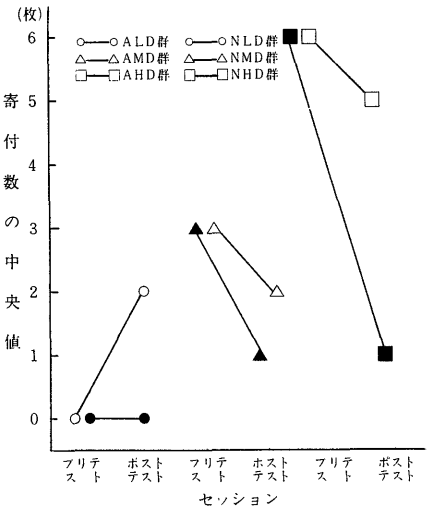


図4　各群のカードの寄付数の中央値

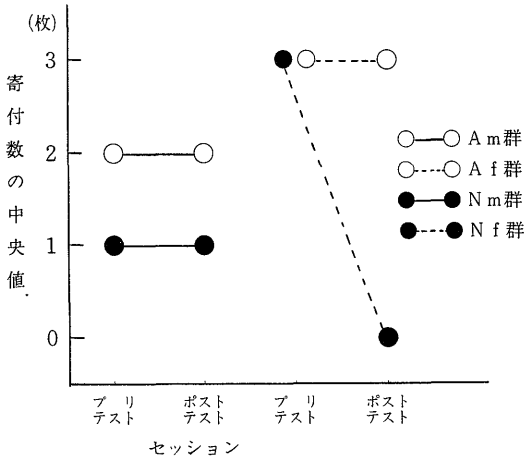


図5　各群のカードの寄付数の中央値

(a)愛他的行動モデル群の男児 (Altruistic model — male ; Am 群と略す)

(b)愛他的行動モデル群の女児 (Altruistic model — female ; Af 群と略す)

(c)非愛他的行動モデル群の男児 (Non-altruistic model — male ; Nm 群と略す)

(d)非愛他的行動モデル群の女児 (Non-altruistic model — female ; Nf 群と略す)

図5に4群のプリテストからポストテストへの寄付数の変化が中央値で示されている。統計的検定の結果，Ｎｆ群においてのみ有意に寄付数が減少していることが分かった（Ｔ＝３，Ｐ＜．005，ｄｆ＝13)。

3.般化テスト　課題であるクレパスの自発的な寄付行動が見られたのは全被験児57名中3名のみであった。

考　　察

本研究の第１の目的は，幼児において，〈向社会的行動〉の１つの測度（指標）である寄付行動の先有傾向にモデリングがどのような効果を及ぼすかを実験的に検討することであった。プリテストとポストテストでの寄付数の変化から見ると，先有傾向の高低によってモデリングの効果に差異があることが明らかになった。すなわち，ＡＬＤ群ではモデル観察の後には有意に寄付数が増加するが，ＡＭＤ群では増加は示されなかった。他方，もともと先有傾向が比較的高いＡＨＤ群ではその水準が維持されず，わずかながら有意に寄付数が減少している。これは，プリテストにおいて５枚以上寄付をしているＡＨＤ群にとってモデル寄付教（５枚）に近づく形で減少したことによるものと考えられる。実験操作上の問題点としてさらに検討されなければならないと考えられる。たとえば，モデルの寄付数はプリテストにおける被験児の寄付数にするなどの操作があるであろう。

一方，非愛他的行動モデルの観察後には，寄付行動の先有傾向の高低にかかわらず有意に寄付数が減少することが明らかになった。モデル示範の方向へ行動が変容することがこれらの群では顕著であるといえよう。本研究の第１の目的に関連して結果から要約される

ことは，幼児の寄付行動に及ぼすモデリングの効果は先有傾向の低い場合に正の方向に現われることと，非愛他的行動モデルの示範効果は寄付行動に抑制的に現われることであろう。

Bandura (1971) によれば，モデリングには3種の異る効果があるという。第1は新しい反応を形成する観察学習効果 (observational learning effect) である。第2は，既に習得した反応を制止したり，制止されている反応を解除したりする脱制止効果 (inhibitory and disinhibitory effect) である。第3はすでに学習した反応を解発する反応促進効果 (response facilitation effect) である。この観点からわれわれの資料を見ると，まず愛他的行動モデルの観察により寄付行動の先有傾向の低い幼児において観察学習効果が見られ，非愛他的行動モデル観察により寄付行動に対する制止効果が現われているといえよう。これらの結果は，現実の子どもの社会化の過程においてモデルとなる大人の愛他的・非愛他的行動が子どもに与える影響が大きいことを示唆していると思われる。

本研究における第2の目的は，モデリングの効果の般化に関することであった。川島 (1980) が示唆したように，モデリングによる学習は行動の基準をより内在化しやすいものであるとすれば，般化テストにおいて愛他行動モデル群（特にＡＬＤ群において）の被験児が寄付行動を示すことが期待された。が，それを満足させるような結果は得られなかった。モデリング効果の般化が普遍的に生じることを本実験では検証しえなかったことになる。

般化の事実を明らかにできなかった理由として以下のような可能性を指摘することができる。

(1)モデリング効果として学習される愛他的行動基準が内在化されるためには，ある程度以上の反復経験を必要とするとともに，ある程度以上の時間的経過を必要とするのではなかろうか。本実験で用いられた手続きでは，モデル示範は1回であり，観察セッションから般化テストまでの時間も短かかったのでこの点を改良し確かめる必要があるであろう。

(2)般化テストにおける課題が幼児には十分に理解されていなかったのではないか。般化テストやセッションにおいては被験児に対して言語的教示が一切与えられず，ただ実験室前で自分の順番を待つ間にポスター（方法で述べられている）を見ただけであった。ポスターからの情報だけでは，幼児はクレパスをいつ，どこで，誰に渡せばよいのかが分からなかったのかもしれない。実際，実験室から出てきた幼児の何人かは，実験室外の女子学生に『このクレパスあげるよ』と言ってクレパスを渡していたのである。般化テストセッションをより工夫し適切な設定をする必要があるであろう。

(3)モデリングによる学習が満足すべきものであったかどうか。本実験においてモデルは寄付行動に対していかなる代理強化も与えられなかった。単に寄付行動を示範し，『お姉さんは10回ジャンケンができるカードを持っているけれど，半分の5枚はジャンケンができないかわいそうなお友だちに分けてあげよう。』と言っただけで，その言動に対する外的な強化（称賛の言葉や表情など）は一切与えられなかった。このために幼児の学習が不十分なものであった可能性が考えられる。今後の検当課題として，モデルの示範行動に対する外的強化やモデル自身による自己強化（寄付時の満足そうな表情などで表わされる）を導入し（被験児にとっては代理強化となる），実験的に確かめることが挙げられるであろう。

本研究の第3の目的は，寄付行動の男女差について検討することであった。表1に示さ

れているように，プリテストにおける寄付数は女児の方が多かった。つまり寄付行動を測度として〈向社会的行動〉を見る限り，男児よりも女児の方が向社会的傾向が強いということになる。また非愛他的行動モデル群の女児（Ｎｆ群）にのみモデル観察後に寄付数の有意な減少が示されている。これは上述の Bandura (1971) のカテゴリーを用いるならば，女児においてモデリングによる制止効果が現われたことになる。この結果についての可能な説明として，能な説明として，

(1)モデル（実験者でもある）が女子学生であったので女児の方がモデルの影響を受けやすかったのではないか。

(2)社会化の過程において，男児に比べて女児の方が他人に対して親切にしたり助けたりすることを躾けられる機会が多いことによるのではないか。

ということが挙げられよう。

モデリング理論においても学習と行動は区別されている。したがって，もともと愛他心があってそれがモデリングにより喚起され，愛他的行動として現われたのか，またモデリングによって愛他心と行動パターンの両者がとにも喚起されたのか，ということが問題になる。本研究において，寄付数２枚（プリテスト時）から4枚(ポストテスト時）へといった行動変容は前者の枠組で理解できるし，一方０枚から３枚へといったタイプは後者の枠組で理解できるであろう。いずれにしても上述のように大人が子どもにとって影響力の高いモデルであることは疑えない事である。

謝　　辞

本研究を行なうにあたり曾根（現門崎）悦子さんに大変お世話になりました。また私立大園幼稚園の先生方および園児の皆さん，ならびに本学部教育心理選修学生諸君に多大の御協力をいただきました。ここに記して感謝の意を表わします。

引用文献

Bandura, A. (Ed.) 1971 Psychological modeling: Conflicting theories. Chicago: Aldine-Atherton. 原野広太郎・福島脩美（訳）1975 モデリングの心理学――観察学習の理論と方法――金子書房(東京)

Elliott, R. & Vasta, R. 1970 The modeling of sharing: Effects associated with vicarious reinforcement, symbolization, age, and generalization. Journal of Experimental Psychology, 10, 8-15.

川島一夫 1980 幼児の寄付行動の獲得における学習形態と他者の存在の影響 心理学研究, 50,6,345―348.

松崎 学 1984 援助行動と分与行動 祐宗省三（編） 観察学習の発達心理 新曜社(東京)

Mussen, P., & Eisenberg-Berg, N. 1977 Roots of caring, sharing, and helping: The development of prosocial behavior in children. San Francisco: Freeman. 菊池章夫（訳） 1980 思いやりの発達心理 金子書房（東京）

Rushton, J. P. 1976 Socialization and the altruistic behavio of children. Psychological Bulletin, 83, 5, 898-913.

Rushton, J. P. 1982 Social learning theory and the development of prosocial behavior. In Eisenberg,

N.-Berg (Ed.) The development of prosocial behavior. New York : Academic Press. 77-105.

Sprafkin, J. N., Liebert, S. M., & Poales, R. W. 1975 Effects of a prosocial televised example on children's helping. Journal of Experimental Child Psychology, 20, 119-126

高野清純　1982　愛他心の発達心理学　有斐閣（東京）

（昭和60年10月31日受理）